

パウロのコリント伝道

パウロはアテネを去って、南西約 80 キロの地にある大都会コリントに向かった。コリントはギリシャにおける重要な商業都市であり、東西貿易の中継地点として繁栄した。しかし町の風紀は乱れ、「コリント人のようにふるまう」という言葉は「不品行な生活をする」という意味を示すほどになっていたという。

パウロはこの町に一年六ヶ月の長期にわたって滞在することになるが、その間、信じる者がぞくぞくと起こされた。ユダヤ人社会の指導者クリスポとその家族の教い、ローマ人の有力者ティティオ・ユストをはじめとする多くのコリント人の改宗、さらにクリスポに代わって会堂司となったと思われるソステネでさえも洗礼を受けてキリスト者となった（第1コリント 1:1 参照）。

しかし、コリント伝道は決して平穩のうちに行なわれたのではない。後に書かれたコリントの信徒への手紙によれば、そのときのコリントにおける自分の状況をパウロは、「わたしは衰弱していて、恐れにとりつかれ、ひどく不安でした」と述べている（第1コリント 2:3）。

長期にわたる伝道旅行の蓄積した疲労、彼自身が「肉体のとげ」と呼んでいる持病の苦しみ、迫害の中にある生まれただけのマケドニアの諸教会についての心配、それに、福音を受け入れないユダヤ人同胞からの継続的な迫害と反対運動、そういう心身の疲労困憊の中でコリント伝道は行なわれたのである。そのような状況の中においてパウロを支えたもの、パウロの励ましとなったものは何か。それは三つある。

第1は、アキラとプリスキラ夫妻との出会いである（1節）。ルカは出会いの事実を淡々と描いているが、実際は劇的な出会いだったと思う。それは神の絶妙なタイミングの中で起った出来事であった。遠くローマでクラウデオ帝がユダヤ人追放命令を出したため、アキラとプリスキラはローマを後にしてコリントの町にやって来た。丁度その頃、パウロもアテネからコリントにやって来た。そこで彼らは出会う。パウロが助けと慰めを必要としているとき、神は彼のためにアキラとプリスキラ夫妻を備えておられた。彼らの出会いは人間の目には偶然のように見えても、そこには不思議な神の摂理のみ業が働いていた。伝道において生活においてアキラ夫妻はパウロの力となり支えとなっていった。

第2に、マケドニアの教会からもたらされた吉報と援助である。シラスとテモテがマケドニアからコリントのパウロのもとに下ってきたとき、彼らは、テサロニケの信徒たちが迫害の中で信仰を守り通しているという吉報をもたらした（第1テサロニケ 3:6）。更にフィリピの教会からの支援金を彼らは携えてきた。それはパウロの伝道の働きを支えるためのフィリピの信徒たちからの心のこもった贈り物であった（5節 第2コリント 11:8, 9, フィリピ 4:15 以下参照）。そしてそれはパウロをどんなに慰めたことであろう！ フィリピの教会はパウロの殉教の死に至るまで彼を支援していった。パウロにとってまさに冠のような教会であった（フィリピ 4:1）。

第3に、困難の中でパウロの励ましとなったのは、幻の中で聞いた主の激励の言葉であった。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。この町には、わたしの民が大勢いる」（9, 10節）。神が共におられるという事実、道徳的に腐敗し、金と愛欲と偶像に満ちたこの町にも神の民がいるという事実、この神の恵みの事実を知ったればこそ、困難の中で一年半もコリントにとどまって、福音を語り続けることができたのである。

今日の「コリント」であるワシントンでも同じことが言える。およそ宗教とは縁のない政治と情報の都であるワシントンにも神の民がいる。そして神の御心にかなう者が次々に起こされて救われていく。このビジョンに私たちは励まされ、この幻に勇気づけられて、困難の中でも忠実に福音を伝えていくのである。